

1950年3月(昭和25年3月)

【槍ヶ岳 東鎌尾根赤岩岳雪崩事故】

この山行は神戸大学神戸工業専門学校山岳部が計画し実施したものである。今回神戸大学山岳会、山岳部で「過去の遭難に学ぶ」のシンポジウムを開催される事は、大変意義のある事と思います。標記の山における遭難は、もう61年も以前の事であり、当事者の方々も亡くなり、僅かに私が残っているのみであります。

この遭難記録を大学ノート2冊にしたためておきましたが、その後の“阪神淡路大地震”で家が壊れて立て替えの為に二度も引っ越しをしたりしたので、その記録帳が分からなくなりました。本日は私の記憶でのご報告と致します。

その前に本日既にご報告が有りました「中国の梅里雪山雪崩事故の件」ですが、船原君は神戸大学山岳会員ですが、この登山のリーダーだった“井上治郎君”は、私の出身校の六甲中学の山岳部の16年後輩で、彼が梅里雪山に向かう時、丁度北京の前門飯店のロビーで出会い、彼に“君も承知の事だが、あの山は雪の多い山だから、呉れ呉れも雪崩には注意する様に！、また神戸から船原君が参加しているから、よろしく”と申しました。彼もにっこり笑い、“良く分かっております。気を付けます。船原君に参加してもらって喜んでいきます。”と言って、握手をして別れたのが最後となりました。

残念な事にあの様に遭難をしたので、折りを見て「梅里雪山へ行って、彼らの冥福を祈りたい」と思っていました。私が主宰する「万里の長城を歩く会」で“雲南～西藏逍遙登山”で、2006年8月20日に徳欽の梅里雪山を訪れ、遭難碑にお参りしました。

所が、中国人の名前は無傷ですが、日本人の名前は全部削り取られていました。

梅里雪山を眺めながら、中国人の心の狭さを感じて、残念に思いました。

私が「官立神戸工業専門学校」に入ったのは、昭和23年でした。

当時学校は長田の西代にありましたが、空襲で殆ど壊されて土木、建築科は松野小学校の校舎を借りて授業をしていました。当時山岳部は西代校舎の焼け残りの部屋を使っていました。

私は神戸の摩耶山上に住んでいて、摩耶小学校、六甲中学にはこの摩耶山から毎日歩いて通学をしていました。自然山は生活の中に溶け込んでいて、六甲中学入学と同時に山岳部に入りました。この学校はローマ法王直轄のイエズス会が運営している学校で、山岳部長はドイツ人の先生でスイス山岳会のリーダーとガイド免許を持つ人で、それまでの私の山に就いての考え方を大きく変えました。

山に就いてを科学的に教えてもらい、山に登るには沢山な事を学ばねばならない事を知りました。この六甲中学の3年生の時にリーダー試験を受けました。山(自然)と人に関する科学的知識と実技に就いて、1週間のテストを受けて合格すれば、この山岳部のリーダーになれるのです。幸いに合格して私はリーダーになる時に、ドイツ人の部長から“この事を誓約しなさい。山のリーダーを続ける限り、絶対に酒類は飲まないと言う事を”

スイス山岳会の永年の経験から、酒類を飲む人は、凍傷に掛かり易いし、凍死もし易い。リーダーとしてメンバーを山へ連れて行ってにおいて、自然条件が悪くなった時に一番先にリーダーが凍傷に掛かったり、凍死をしていたのではメンバーの安全を責任持ってやれなくなるので、この誓約は絶対に守らねばならないと。私はこの誓いをしたので、リーダーを務める限り酒類を飲むこと無く、今日まで66年間守って来ました。

さて昭和23年に神戸工専の山岳部に入った時は、18人ぐらいの部員がいて放課後の部室では「ヒマラヤ遠征」が話題に登っていました。私はドイツ隊が三度攻撃して登頂できなかった“カンチェンジェンガ”をこの山岳部とOBでやろう……と言う計画に大変な興味を持ち、何とか卒業までに実現したい……と思いました。当然日本の積雪期の登山を確りやらないといけないので、大山の冬の北壁に挑戦したり、穂高の岩壁に取り付いたりしました。昭和24年に“新制大学法”が出来て、日本の大学制度が大きく変わり、官立神戸工業専門学校は、神戸大学工学部に編入されました。しかし旧制のまま卒業を希望する者は、神戸大学神戸工業専門学校で卒業する事になり、私は旧制の学校にあこがれていましたからそのまま旧制に残ることにしました。

さあそうなると、旧制が終わるまでに「ヒマラヤ遠征登山」をやらないと、旧制としての幕引が出来なくなるので、山岳部の部室でその「ヒマラヤ遠征登山」も熱を帯び、その為の準備や訓練等に忙しくなり、当時3年の先輩達が卒業した昭和24年秋から当時ヒマラヤ登山の常識だった“ポーラメソッド”方式での登山を積雪期に行おうと決まり、その準備を進める事になった。予定は昭和25年春に卒業する上級生が主体で、それを支えるのを私たち2年生（我々で最後）である。当時3年生が8人程度いて、この全員が参加する予定であったのが、24年年末になると殆どの上級生が参加しなくなり、2年生も二人と言う事で実施が難しくなった。当時チーフリーダーを八巻さん、リーダーを森さんが取り仕切っていて、結局4人ではとても“ポーラメソッド”方式での冬山はやれない……と言うことになった。当時森さんは旧制中学の山岳部と交流しておられ、灘高に山岳部がありこの部に話をつけて詠村君や其の外からも呼んで来て6人のパーティが編成された。

しかしこのパーティは、今まで一緒に山を登った事も無いパーティで、こんな混成パーティが良いのだろうか……と思ったが、上級生のリーダーのやる事だから、私は自分に与えられた仕事をこなす事で精一杯であった。

私に与えられた仕事は、先輩にお願いして回って、登山資金を集める事、この登山の食料を確保し、ベースの有明の中房温泉に搬入する事であった。この当時は食料不足だった。

1月実施のこの登山が、参加者の激減で1月は無理となり、結局3月にずれ込んで仕舞った。上級生の八巻さん、森さんも卒業間近で八巻さんは米国へ留学する事になっていた。この様な状況の中、登山は開始され、私は信州の田舎に“餅”の調達に向かい、まだ戦後の食料事情の悪い時ではあったが、何とか40kgの餅を調達して、一人でこれを担いで中房温泉まで運び込んだ。丁度皆もここに集結して、“ポーラメソッド”方式の登山で「槍ヶ岳東鎌尾根アタック」へ進む事になった。

何分ここに集まるまで一緒に登山もしていないメンバーだから、お互いの実力も経験も分からない混成部隊で、私は正直このパーティで本当にやれるか……心配であった。

兎も角有明温泉から燕岳の山小屋へのボッカが始まる。4日かけて何とか装備、食料等を荷揚げした。燕岳から大天井岳へは、良く仕舞った稜線でアイゼンも良く効いて快適であった。途中蛙岩、為右衛門吊岩と通過し、切通岩に装備をデポした。大天井岳を経て赤岩岳に掛かった時から、天候が悪くなり吹雪となったが、森リーダーが“西岳”へ行けば山小屋があるからそこまで行こう……と吹雪の中、前進をした。

ほぼこの辺りが西岳小屋だと言う所で小屋を探したが見つからない。吹雪の上暗くなるし、その当時の装備ではこの吹雪の寒さをしのぐ事は出来ないのでは、何とか早く見つけてと探し回ったが、結局小屋は無く仕方ないので雪洞を掘った。すると1m余りで小屋の便所らしき物に当たった。結局冬はこの“西岳小屋は解体して無かった”のである。

吹雪の中1時間余りこの“西岳小屋”探しに時間を使い、すっかり体温を失った事も、遭難の始まりと言えるだろう。リーダーが小屋の持ち主に確認しておかなかった事である。

何とか6人が入れる大きさの雪洞を掘り、吹雪は3日間続いた。下に敷いていた“油紙”を通して体温で解けた水で衣服がビショビショになつて、とても寒い。偵察に西岳へ足を延ばして、3日間雪洞に閉じ込められ、食料も1日できれて、ジャコをなめなめして飢えを凌いだ。3日目の朝雪洞から顔を出すと、風は可成吹いていたが、雪は止んだので、このチャンスで燕山荘まで帰って、再度態勢を立て直して東鎌へ向かう事にして、午前8時に西岳から赤岩岳へとバックを開始した。

この時のオーダーは、トップにC. Lの八巻、2番詠村、3番森、4番上島、5番福田、6番稲垣だった。西岳を出てからも北西の風は強く、濡れた衣服の我々は、凍傷にかかる恐れがあり、赤岩岳の稜線を避けて稜線から10m程度下をトラバースにかかった。

トップが赤岳の中間付近に差しかけた時、パシッと言う音と共に私の右足が下へ流れ出して左手に持っていたピッケルを差し込んで、右足を浮かした時、前を進んでいたトップの八巻さん、2番詠村君が斜面を滑り落ちているのを見た。“一瞬雪崩だ”と思った。

幸い50m程度でこの二人は止まった。今助けないと……思った。所がザイルは森さんが持っていた。彼も早くザイルをと思ったのだろうが、何分ザイルを解いて彼らの所へ投げると時間が掛かった。私はこの二人にザイルを下ろすまで動かないで……と大声で叫んだ。彼ら二人も不安定な姿勢で立っている。やっとザイルを下ろしかけた時に二次雪崩が起こり、二人の姿は東の“一の俣谷”へと落ちて行った。思わず“アッ”と。

ほんの数秒後、下の谷でドンと言うすごい音と共に雪煙が上がって、不気味な程静かになった。雪崩……遭難……私の頭を駆け巡った。このままでは残った我々もこのトラバースをするとまた雪崩の危険がある。“森さんバックして”と声を掛け、赤岩岳の手前に戻った。森リーダーが“福田 どうしょう……”と言った。私は森Lの気が違ったのではないか……と思った。こんな時こそリーダーがリーダーらしく毅然とメンバーの我々に指示をするべきではないか！私の立場で森Lにものを言うのは……と思ったが、こんな非常の時だし、外のメンバーは工専の山岳部員で無いので、私は森Lに進言した。

“一の俣谷へ落ちた二人が生存して居る可能性が有りますから、とにかく現場へ行って、彼らを救出する事が大事でしょう” “そうか、そうしょう”で隊の行動は決定され、谷へ下降できるルートを探す。西岳の東の尾根しか下りられないだろう。西岳まで戻りルートを探した。雪の斜面を下るのでは、また雪崩の危険があるので、岩場を下る事にした。森Lは全く元気無く、“福田トップで”と言われて、氷の岩場を下る。

一の俣谷へ下りたら、既に午後4時で谷底は暗くなった。雪崩現場まで兎も角遡行しなければならぬ。約1km程度溯る事になるが、この谷には両側から雪崩が落ちて居て、デブリで谷が埋まって居た。大きいのは、家の大きさもあり、これを乗り越えるのが難しい。スリップしたり、デブリの固まりの間に落ちたりしながら、真っ暗になった谷を必死になって溯った。このあたりと思われるデブリの所で散開して探すも既に午後8時で全く見えない。懐中電灯も無く、ただ叫んでの応答を待つのみ。約1時間近く叫んだが応答なくこのままでは今度我々が二次遭難を免れない。森Lに兎も角この谷を下り、一の俣小屋まで行きましょう…と進言し、先程必死に登ってきたデブリの谷を下る。勿論真っ暗である。

却って下る法が良く滑って、団子の中へ落ち込む。約2km近く下って、何とか槍沢との出会いにたどり着いた。一の俣小屋がここでも無かった。もう2日間なにも食べて居ないので、ここでピバークすると凍死する可能性があり、人の居る小屋へたどり着かないと死ぬと考えて、梓川沿いに横尾を目指す。この横尾も無人、次の徳沢園まで下れば助かるかも……と夢遊病者の様にフラフラしながら河原を歩き、やっと徳沢園にたどり着いた。小屋番が居てやっとおかゆを作ってくれて、生きた心地がした。時間は午前4時であった。

知らない間に囲炉裏の側で眠って居た。2時間程寝た様で午前6時に目が覚めて、もう一度昼間に捜索するのが良いと思っていたら、森Lは俺は神戸へ帰って、救助隊を頼んでくるから、福田は現場へ向かって捜索をする様にと。私はビックリした。

神戸へ帰るよりも、遭難した二人の安否を確認する方が先ではないか……

結局森Lは、他のメンバーを連れて、上高地へ向かい、神戸へ帰って仕舞った。

それから私は毎日徳沢園を朝6時に出て、一の俣の現場に午後2時に着き、約2時間捜索して徳沢園に午後10時に戻る捜索を続けましたが、次々雪崩が落ちて居て、結局1週間探しましたが、見つける事が出来ませんでした。以上が遭難当日の状況です。

【この遭難の原因】

- (1)当初参加の部員が減って仕舞った事。何故参加するはずの上級生が参加しなかったのか
- (2)神戸工専山岳部として、この山行が実施出来ない状態になって居たのに、他の人を加えての登山を強行した事。
- (3)リーダーシップ、メンバーシップの不足。
- (4)装備が十分で無かった。当時はとてもお粗末な装備であった。
- (5)リーダーの資質と力の問題。
- (6)西岳小屋の冬季の状況調査不足。小屋持ち主への連絡をしていなかった。

以上 要点を報告致しました。

2011年2月

神戸大学山岳会員 福田 久勝

昭和25年(1950年)3月 槍岳東麓尾根・赤岩岳雪崩事故 行動ルート図

